繪本西遊記

初編

巻之六

へ遠71
2500
40-6

特1逸へ門
號 2500
巻 40-6

凡士農工商とも夫々の職分家業を固て相用の器物を造り
今日を営む事世界一般なれ共此迷世写本の巻中小説の白眼
なるべき種々の書入又は形容賞美なるべき太閤人物見聞
男女の情態等迄画き君臣父子の中々面白き赤め合事
同じく今人一時の興に寄せての戯作なれども
其職分に通ずる人情付の小説を綴り著述し筆者の作り
なるべき言語と成て其通ちを知る人の戯画樂書等迄
池田屋清吉是を欲れ給へ事源氏式りて諸君子所ふるる爾

慶応山人識

和漢 貸本所 東京牛込袋町 誠光堂 池田屋清吉

日本史人巻之六

繪本西遊記初編巻之六

前章之下

此時孫行者大きに怒り你等我一棒と云て試よとて耳の中
より鐵棒を引出せば六人の賊等大きに驚き我先にと逃去る
きを見者ども追かけ追かけ如意棒を振て一人も残らず
打殺せり三藏是を見て眉をしかめ前方徑の賊原悪行の
者とは云ども悉く刑に究者なれば你いかんぞ都らずして殺や
行者の曰く吾今他を殺さずんば他却て我師父を殺とべし三藏の
曰く我が生涯たりとも人を殺さること決て人を殺さることを
汝今既に佛門に入りかくのごとく暴悪を止めざんば善果を得

孫悟空

三蔵

孫悟空

三蔵

法器

奉受来たり〜行者是をけてんよりよく知り我西天に至りても善果を得ることなくんば師父に別れて是より帰るべしと云うや早く身を翻し虚空に揚り東の方へ飛去らんとせんとなく頸を仰く東をさぐりまもれども行者の形ちのみえざれば行者をうて馬に背せそづら轡縄をとりてかわそくも去性なく八戒は前面より一人の老女まに綿衣と花帽とをさげ出まり三蔵を見て問て曰長老何因ってか此まにや三蔵の曰く貧僧は東土大唐皇帝の勅を受西天に往く佛を拝し経を需んと欲とる者なり老女の曰く西方如来の在大雷音寺とは此の家を去る幸十萬八千里長老只一人いずくか〜と行者は八三蔵の曰く前刻きて従者一人有しが長老は生得頑愚にして唯今吾我捨て東方へ飛去りたり

老女の曰く吾も幸ひ東の方へ往者なれば師父に逢ひて呼び〜幸ひ後へ〜又此綿衣直裰と敬金花帽とを長老に送りたてまつらんの師父子同り去る時直裰を着せ花帽をいただかせ我教ゆる咒を唱へまへ〜とて西方幸をとなへて是を授けて三蔵の耳にをとをせ定心真言の咒文を授け長老固く心に秘して人にをしへまへとなれば此咒文を紫箍咒とやいひて忽金色の光りを身より放ち東の空へ花去りぬ三蔵咒をうけて観音菩薩の眞言をさづけまへとなりがく香を焼て礼拝し直裰帽子の二品を包袱の中へ入れて行者の同るを待居給へ此時行者は触手雲に乗り只一筋に東海龍王の許に至る龍王行者が来るを見て孔を臣て曰く大聖ようこそ久しく此難を免れ給へる行者の曰く

孫再歸
奘
奘邪縛
孫
三藏

悟空

我観音菩薩の勸めに依て唐僧に侍ひ西方に至往とのたまふ
は故をいかゝいまゝ出成免れう龍王のいらく大聖邪と改め正に歸
何事の收びう見に来ゝ〜大聖西方に至らざして却て東海
まゝへ何のなぞや行者の曰くかの唐僧ゑぜく吾前生の賊と
打殺したるを以く喃と我を吃りい故打捉て来ゝ見にまれり
五再び水簾洞に入く快くたの来ゝとて龍王の曰く大聖大きに
あやまれり今ゝ簾洞に帰りいもやう〜妖仙の魁ふして逐よ
正果を得るの期あるべうべきやく観音のむ〜よきさび唐僧を
見して西方にいたり全き善果を得るべいとをゝめられば行者とう
むきてまた平按ど石ろを忽席とうゝ吾再び唐僧と供
西に赴べしとて龍王に別れ花来ろうるぐ雲中にて観音菩薩

に出会うり菩薩の宣く你我教誨にたゝひ何方へ来ったるや行
者急に礼となして曰く唐僧を請る事きび〜に故東海に
行て乳糸のば〜いたり見よゝ〜師教のゝく僧を供をして
西天に至りいんとて観音と相別を須臾の頃に向の西に向う三藏
の前に来り師父路を急ぐべしといつまで言に成〜る〜中三藏が曰
我は唯安にありて你が帰るとまち居ゝう拝你何處へ往るや行
者の曰く我東海龍王の家に往く茶を飲て来ゝとう三藏の曰く
你偽りと云て我をあざむく事なゝれ暫時のうるに何ぞ東海に
至ゝ来らん行者答ゝく師父吾雲に乗りて一瞬に十万八千里を
行事成ゝるゝに東海に至る事何の間ぞうこれあらん三藏の曰
く你は是神通をはるゝ既び龍王の件うて茶と吾まれゝ五ゝ

三藏
悟空

揭諦
伽藍
功曹
えんえんの山間
悪龍
吃三藏
馬

在て碁子飯う你包袱をひらき中なる乾飯をとり出し吾に
あたへよ行者かしこまり包袱をおしひらくるかの直裰こそ帽あり
行者両品をうけ取て曰く師父此衣帽は東土より持来りまへるろ
三藏の曰く汝我初雅的着せ〳〵帽子直裰なり此帽と戴ばは
習ふ法を授て經を讀直裰を着るとれば聞ぞ乳を飲る行者の曰く
師父此二品を我に賜らんや三藏の曰く是は吾身邊の寶貝なれ
ども你に附属しなば行者先身に直裰を着〳〵頭に帽子を
戴きたり此は三藏老女の教る緊箍兒とは口の中にて唱へまへば行
者忽地に倒れこそいたる何と一頭の痛むこと甚なるぞや疼やくと
叫びたまかぶり帽子と粉微塵に裂破れば中に一條の金箍ありて
取ども不下獄ども不断金箍より恨を生じて肉と俱に住らなり

たり三藏も不思議におのれ口を閉て咒を止めまへば行者頭疼
痛軽く治〳〵恰も平常のとき寂に於て行者大きに怒り拜の
中に如意棒を抜き三藏目がけ唯一打とうり上ぬまへば三藏又
口中に咒を唱へまへば持る鐵棒を大地に打捨ある痛やく師
父申るさせまへと声を上げ頭をかゝへ涙を三藏の曰く你
今より心を改め我教を守いこれを敬さん行者の曰く我敢く
師父の命を守りべしさるふても此法い何人か授るべしやと
同人三藏の曰く向の一人の老婆なりて我におしへうり行者是
をもて此老女いかなるべき觀音菩薩ならん吾を師父にそむら
きあるさる方便の計をそれあらん何事る此法い師父の教をそ
むきたまはまゝ師父もまこと情なく此乖く咒を念へまへるとき

孫呼土神
討龍所在

悟空

土地山神

とて三藏を馬にかきのせ後より着く西方へいそぎゐる

蛇盤山諸神暗佑　　鷹愁澗意馬收韁

さるほどに三藏は悟空と俱に数日をゝくるに西の方へ赤きまゝ山間の澗の中より忽然として
埔月ちぢにはるゝ翔風凛くいとゝゝきに山間の澗の中より忽然として
龍あらはれ出浪をひるがへして跳まわる行者是をみて忙三藏を
馬にうち抱きおろし高き山崖の上に居らしめ耳の中より如意棒を取
出し提く旧の所ふまてゝ汝が師父の乘り白馬龍と俱に在ると
知り給ふ行者の其所よりうち行者大きにあやしみ思て三藏
にかくるに只今の龍と打殺さんとそゝ[illegible]ゐるも誰ろ討ん師父の
馬を吃ひて澗の中に隠れゐると相見く行李のくるくるとして其

再びかゝる悪龍をたつゝ出し師の馬をとりに
やるべ暫くはそこに待せ給へと云捨て出ゐを三藏枝をとて
[illegible]所へ行らん跡へ今の龍出来りて我を吃んも
はうかとこ你決くしてそを驚く事なかれと仰ける時に忽ち
虚空に雲ゐのく妖老おそれまゝとゝゝ我単衣にあつて
急難を救ひまつらせん行者是を聞て左云ものは何者ぞや又
虚空に声ゝて我くは六丁六甲の神五方揭諦四値功曹護駕
伽藍菩薩観音の命を受け徑を求るゝを守護せゐ行者安く
却は是等の神将師父を守護せゐ今は心を安ゝとゝ[illegible]
澗のほとゝ走り行き翻江攪海の神通をはたらかし澗水をひるがへし
泥あらとかき濁せばゐの龍たまゐるを牙をゝ[illegible]て跳を出悟空と

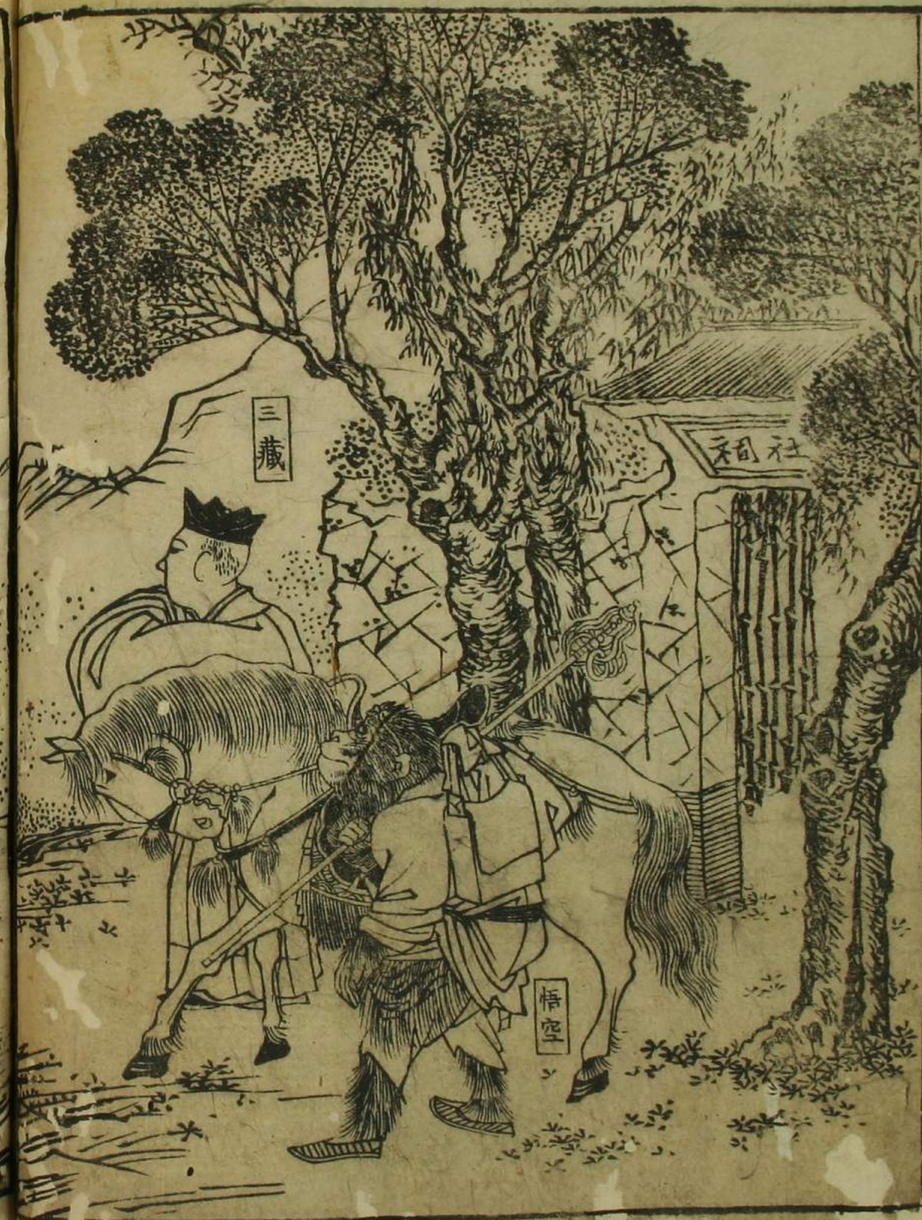
柳枝撫
龍
目前化
馬
觀音

揭諦
悟空

我こゝに半時ばかりさもの大龍力労れかゝるひゞこゝやちのひゝん
身と変じて小蛇となり仲の中にかくれこう行者いかゝ思う大
声を發し喧字咒語を唱へ土地の山神と呼出し龍の在所を
尋ねよとの山神ここゝに中なる八尺の山を蛇盤山と号し洞を
鷹愁洞とやてむしよう曽く邪神住て居原来洞の底清く
きゝ鴉鵲のたぐひおのれが巣を群鳥とあひ伴くあつ底に偏る
そもつく鷹愁洞の名ありさる清き洞あなれば悪鬼の住ざれ
いられなゝ前年観音菩薩一條の業龍を式洞に放ち狂を
取るゝ八尺ばかりの只今観音菩薩を請ひ来ぶ式鬼忽ち
生まれつゝ行者見を留て南海に参り行き観音を請来ん
ゝ式洞空中に在ゝ金頭揭諦の神まで曰く大聖ゝ

待ゝ我南海に行く菩薩を請ゝまらんとて南を指て飛ん
きゝの暫時の内に観音といざるひ蛇盤山に立回り行者菩薩乃
まつるもとて忽ち罵く曰く你い是大慈悲の教主にして何そ
我あざむき帽子と戴せ又唐僧に緊箍兒とやゝん咒とおしへ
我頭を疼さもる事いそもゝ何の慈悲そや菩薩の曰く你仏門
の教ゝ順ぐ反若かゝのごくせざれい再ゝび悪事となりて天上を
闹そゞ是你に正果を得させん我慈悲ゝ行者曰く我ゝ
今式洞ゝに悪龍と戦ち罷我師父の馬を吃ゝ西方に行く
途を妨ぐゝ是ゝ又慈悲なりや菩薩の曰く我式所に放ゝ置し
龍ゝ西海龍王の子なり向ゝ式洞底に在く狂を取る人を待ゝ
ゝに你其狂を取ゝを去ざるにより渠きゝ馬を吃ひゝなぐん

莽入里
社得馬
皆具


三藏
悟空
社土地

とて揭諦に命じてかの龍をよび出し柳の枝をもつて龍の渾身を拂ひもつて忍一疋の龍馬と変じ柳の葉三つを摘て行者が頭後に忍く三根の毛と化作若大雅に逢ては三根の毛其災ひをとゝのへ化作唐僧を守護せよと祈んごろに云含めたまひ南の方へ走りもつて行者御師を礼拜し龍馬を牽て三藏の前に来り車の子細をはなまびらかに物語まつれば三藏南に向ひ二拜しまつて馬にまたがり澗を渡り山をくだり西に望んで馳もつて紅日西に沈む天色もゝ晩まんとする路の傍に一つの廟あり里社祠とかゝ大字を書て門にかけたり三藏馬より下て門内に入るに内に一人の老翁あり三藏師弟をもて齊飯を設け一夜を宿せしめ翌朝馬に鞍書其外皆具をとり出て三藏にあたへ俱に送て門を出るゆゑ忽然として者翁の姿を失ふ時に空中に声あり云く我は落迦山の神なり観音菩薩の命を受け馬の皆具を與へんとなり云終て雲井をさして去りぬれば三藏忙ぎ空に望て礼拜し又馬に鞍うち西の方へ急きまゐる

観音院僧謀寶貝　黒風山怪窃加袈裟

扨も玄奘三藏孫行者が西の方へ両月余り急ぎまゐるに已に春の気色のどやかに霞たなびき木草の色翠を帯て嶺のあらはれてきさうなるも西番哈咤國とぞきて遥に山の四の方に樓閣建てたゝゆる寺院あり三藏うの寺に一夜を宿ぐ〻とかしこにつるりとなりて正殿の屋上に観音禪院と大字にして額をかけう

會本白旻已刀編六
觀音院
中展觀
袈裟
三藏
悟空

三藏馬より下り山門に入て案内とゝひ見れば一人の僧出て何
處の人と問ば三藏是く其来歴を語りたまへかの小僧三藏といさ
まひく方丈へ伴なひ行るが孫行者とつく〳〵世ていかる醜る
のこの形々よ恰も是猴の一般と密に心おもひつゝ遂に方丈に
至れば院主和尚数多の僧とともに出迎て茶菓を設し
さまく〳〵にもてなしまわらるゝ時に一人白鬚の老僧出来り三藏に
礼をなし童子に命じ白銅壺を提三杯の香茶を三藏に献んぬ三
藏茶をうけて其器のうつくしきを称ず讃ずれば老僧笑ひて曰く器
何ぞ貴重するに足らんや貴僧上國より来りまへ定て此處に
弥〳〵き寶を持ひらん我に一見をゝしまへと云三藏笑ひて貧僧
いぞうる寶貝を持らん時に行者進み出て曰く師父かの袈裟

見せたまへ院主の曰く袈裟のごときは此寺に七八百し所知しいたるも
うるい〳〵き東西なりとも見るに望みなくんと云行者是をきて忽
行事をとり出し是を開んとせ三藏ひきとゞめて密語て曰く你人
と富を爭へとこゝろれ貪婪の人是見べ必悪心を生ぜべ〳〵行者の
曰く老猿是にあり師父放心し給へとて遂に包袱を開ば綿襖の
袈裟を取出せば其紅光堂に滿彩色い庭に盈て衆僧ことゝ
〳〵く驚歎をる事大きなりて老僧果して欲心を生じ三藏に向
ひ曰る我今年今月まで かる紅光加衣袈裟をゝて希に一おもして
得と拝見なき あるべとゝを合をてをるに三藏い等しきを詞
和〳〵ぶ兵默〳〵おもひ〳〵るが行者去ひ你が数多の袈裟の衣のと
いでもかゝのできぬ光彩いあるでゝ〳〵ぶ式夕一夜い師に請て你ら

衆僧
慾心
放火
禪堂

借問老僧大きによろこび遂に後房に入て燈のもとに彼加衣
袈裟をひらき我うるはしき加袈裟を着るなら世の望こゝにて
さんとてさめ〳〵と泣れば廣謀とつゝ和尚をこゝに出老僧さばう
氏加袈裟を乎〳〵あらぬ計をはく集ひえこゝに今宮僧猿
ゆきて禪堂の中によく森うゑに堂の四方へ柴薪を積上ケ
火を付く焼殺さば氏加袈裟自然老僧の東方とるべし老僧
見をさてかぎりなく泣び氏さうこと叫なりて衆僧に
命じて其用意をなさる氏は悟空八三藏と倶に禪堂の内
睡を居らしが外面に人音さわ〳〵きをやるなよあやしと忽まち
身を変そ一ツの牽とる牛の間より出く親ふに多の僧どと
宋薪を庫にて禪堂をやくんとす行者見をとゝ果し姉父の

言のごく我袈裟をとらんと欲してかく惡ふを設しるよ
よ〳〵ゆもまく他が計てる就く計を列んとて直に玉ヶ駈登
廣目天皇の許に走り行辟火罩を借まり禪堂の上ヶ打もひ
其身は後房の屋上に登して加袈裟を守護し火の燃出るを待ぬ
たりとゝろくの僧徒行者がかゝるもまぶ禪堂乃
廻り〳〵火を放てば行者忽まち大風をまゝき出し火焔四方う
散して本堂方丈回廊鐘樓こぐく燃上り防ぐべきやうあら
されば僧徒皆にゝてさらぎ器財衣服を拿て猛火の中に出走り
ふめきさけぐあり〳〵ぬ月もあてられぬにゝなりて実に觀音院と
南へ去る事二十里ほ〳〵黒風洞とゝふ所あり洞の裡に一個の妖精有
氏火光をとゝく火を救ひぐやと雲に騰て觀音院に来りて八九諸堂

黒風妖精盗去袈裟
黙漢

そぐく火焔の中にうづもれたるに禪堂と後房のこと更よ火猛くて
ゐやしと目を止く是をうるに後房の屋上よ一個の老猿在て風を
まひきて座し居るうかの妖精牡ぎ房中に入く見るに案に霞
瑞彩かゝやきてうる綿襴の袈裟をうるを妖精是をみて心に思
こゝに密に袈裟を偷んて黒風山へ陥りもう既に五更の天よりう
火もやゝくにきづまれば行者禪堂に藏ひる辟火罩をとりて
天よ上り廣目天王に逢て復蜂となりて禪堂に入り師父を眩惑
て事の子細を物語りぬるに三藏大きにおどろきまん忙ぎ火を用
きてひるまんにさしも華厳に建たるねる觀音院悉く灰燼とな
ぬて彈堂後房 〃 後うる孤れ〃三藏いかきれなるうえ加衣袈裟
ゐうるに馬を行

後三藏師弟をうく大きに驚き一齊に老僧に是神人なりかる
大火にいかゞ曾て燒死せんやく袈裟を返〃ものとやにて老
僧も弟に驚きうの袈裟をうれいかゞ行〃やさに見く源
今ハ唐僧に逢て何云分をゞきやと遂に拄のえにえようて頭を
碎き死ようる行者見をゆて大きに怒り必定下僧徒がかくし
たるに遠ひなくとて燒殺り箱籠を查るれども曾て此の如く
へをうんで三藏に伴をうて源く行者をううて你我寶貝を猥に
他人に借あるへ今何のはりうるにるやうやく袈裟を得るゆをさぞん
ば我必を緊箍兄と唱へ匿行者ゆて大きに懼れ師なかるに
此袈裟をたづゆ出〃ゆべ〃とて衆僧にじうひ問〃白くはうに
邉りに妖精の住事いなきうに後王の曰く是より二十里半り南に

悟空乘雲趣黒風洞

黒滝山黒滝川と中處あり川の裏に一個の黒溪ありて此者常に老僧と交り深く當院へ往来せり此黒溪頗る神通ありて此不らの妖精なり行者の曰く師父の袈裟を偷こと可し将に此妖精に殺ひなんぞ取ゝてまるべしとて三藏に暫時のいとまを乞忽ち雲に乗びのり南を指て出れり衆僧行者の神通を感じて大きに驚きいよ〳〵三藏を敬ひ後房に留てもてなす

池清

繪本

曲亭馬琴之作
其外諸先生作

軍書
敵討
諸家騒動
御捌物

書本

倭軍書
唐軍書
隨筆物
國々名所
近世戦争書類
滑稽物

右之外數品市庭に覽く奉願の也

東京牛込細工町
誠光堂 池田屋清吉

書物貸本所